

第14話〈銀山発見〉の要約と参考資料

第14話〈銀山発見〉の要約

昔の修験者が、山中に仏を配して浄土に見立てたのにならって、土呂久の神仏配置図を描いてみました。浄土になるために必要なのが、金、銀、宝石の輝きでした。「聖なる価値」をもつ銀を土呂久で見つけたのは、修験者だった佐藤道元の子孫ではなかったでしょうか。

第14話〈銀山発見〉の参考資料

14-1 古祖母山

川原一之著「浄土むら土呂久—文明といのちの史記—」P17より

土呂久へ登る道の真正面に、堂々たる威厳をもって古祖母山がそびえたつ。

あたかも大鵬^{おおとり}が長さ三千里の翼を悠々と広げ、豊かな胸に雛でもかばうようにして、谷間の村々をやさしく抱擁する山。流れる雲を背景に泰然とした山の相は、まさしく慈母の姿にほかならない。山のもたらす豊饒な恵みを受けて、谷間の村々は<いのち>をつむいできた。山に春がくれば生き生きと活動し、山の夏とともに激しく燃えさかり、山が色づく秋に収穫で忙しく、山の冬化粧の間はじっとこもった。山をめぐる四季を節にして、むらは年輪を重ねたのである。

もちろん山が、いつでも優しくなかったわけではない。時に嵐を呼び、時に落雷を招き、時に洪水をもたらし、時に地鳴りをあげて崩れ落ちた。怒りたけつた山の姿は、まさしく巖父のそれであった。谷間の民は山の怒りを鎮めるために山の神をまつり、深い畏れと敬虔な祈りを絶やすことがなかったのである。

古祖母山を仰いで暮らした人びとは、この山を<いのち>の故郷とみなした。この山から<いのち>が生まれはぐくまれ、いずれはこの山へかえっていく。魂の安らぎの地を天上にもっとも近い山に求めたのである。崇高な山に素朴な祈りが結晶して、山は神となった。大自然と切れることのない古代人の意識が山岳信仰をうみ、その信仰の上に山の民の生活が成り立った。

古祖母山はこの地方の農民の<いのち>の母だったのである。

14-2 土呂久の神仏

川原作成カード（土呂久図書館 A-2-2 DSC00193~00196）

延宝2（1674）年仏明帳

折原	祖母宮大明神	一間四面	石すゑ御殿
みなみ村	あみだ、薬師	三間四面	礎居

土呂久 地蔵 三間四面 石居

日向国高千穂庄神社仏閣神体仏像改控（時代不詳）

南 薬師如来

土路久 地蔵菩薩

土路久 天満宮

延享 4（1747）年

折原 祖母大明神 本社 1間4面 境内 豎32間 横36間

祭礼 9月13日 神楽 祝子 八弥

とろく 天神 但神木 祝子 辰之介

文久 3（1863）年 樋口種実「高千穂神跡明細記」

土路久 地蔵菩薩

南 薬師如来

土路久 天満宮

慶応 4（1868）年 神社書上帳

土路久 祖母宮大明神 本社 豎1間 横1間 境内 豎32間 横26間

明治 4（1871）年

土呂久 祖母宮大明神 境内 32間 26間

土呂久 天満神社 境内 無之

土呂久 八幡社 境内 40間 40間 佐藤参木持

大正 6（1917）年 和合会議事録による祭日

地蔵尊祭 旧1月24日 土呂久一般（各組）

金毘羅祭 旧3月10日 同上

下宮祭 旧3月19日 惣見組

大師祭 旧3月21日 土呂久一般

姥宮祭 旧9月13日 南組

八幡祭 旧10月16日 土呂久一般（各組）

鍛冶屋祭 旧11月8日 同上

高千穂神社仏閣簿 元禄 4（1691）年 12月 11日 （土呂久図書館 B-1-1 DSC7715）

一、薬師 みなみ村

一、地藏 土路久村

一、天神 土路久村

一、真宗寺 泉福寺

但 □寺前方ハ土路久山ニ存シ 之レ只今ハ五ヶ村ヘ□リ□迄貳拾五年ニ不明

甲斐叡常著「高千穂村々探訪」176より

竹之上に「あみだ堂」がある。延宝二年の仏明帳には「あみだ、薬師、三間四面礎石、みなみ村」とあり 17年後の元禄四年の仏閣法には「あみだ、竹之上村、薬師みなみ村」となっているのでこの17年の間にあみだ丈を竹之上に移したと思われる。この阿弥陀様はおりわら（南）姥岳明神の別当寺天台宗檜ヶ原真相坊東福寺のあみだではないかと非宝氏は言っておられたが、その事を竹之上の堂に書いた由来書を残されている。1メートルに近い大きな立派な阿弥陀様である。

14-3 天神

佐藤福市さんの話（1983年11月24日電話で聴取）

美芳さん方（「車庫」）の裏に、天神森と呼ばれる地名のところがある。ずっと昔、そこに天神さんがまつってあったという話だ。場所は樋の口の下あたり。今じゃ、若い者は「天神森」というても知らん。そこに社があったかどうかは知らん。神木は聞いたことがない。

高千穂町史 P745より

高千穂の神様の中で最も祭られている神社の祭神は、天神様で134社もあるが、高千穂で祭られている天神様は特異なもので、大宰府で祀られている、菅原道真公を祀る天満天神では無い。天神地祇という場合の天神で、国津神に対する天津神の天神である。

14-4 地藏尊

佐藤弘さんの話（1978年12月2日聴取）

地藏さまは火の神様ということじゃが、和合会で土呂久に持ってこらしたげな。場所を和合会で買ってから。昔は4メートル角のカヤ葺きの社があったってすよ。終戦後の台風で大木が倒れかかって家を倒した。それから社が小さくなった。うちのじいさんの達の若いころに来たんじゃろ。火伏せの神様というて、祭は旧の正月24日。部落の人がお神酒をあげたりする。その祭り日に和合会の総会をした。今も、公民館の総会はこの日。ずっと前は、うちで総会と祭りをしよったってす。やめて10年くらいになるでしょうね。公民館でやるごつなって。

イチョウの木はウメノばあさんが植えらして、70~80年になる。ウメノばあさんはここを出て、大分の小手川におる。兄弟（ウメノと兄の忠行）で一緒に2本植えた。地藏さんが来らしてから、その社の前に。鉦山時代は葉もあまりつかなかったが、ついても青い葉のとき（夏）に落ちよった。実もならんかった。地藏さんは、何年も何十年もえらいな煙をかぶった。

地藏堂に置いてあった塔婆の文面（1984年1月8日調査）

表 仏師 時ハ明治三十壹年旧十二月二十九日 藤田金五郎 御粉

奉納 鶏亀地藏菩薩御粉免

仏師ハ愛媛県喜多郡辛崎村光盛仏師 藤田金五郎光盛

当時大分県直入郡竹田字山手町寄留（以下、木の破損）

裏（二度書きされている。一度は表書きと同じ明治31年、二度目は大正元年のもので、このときは墨が薄いし、筆者も異なっている。二度目の粉免は土呂久の人がやったと思われる）

横（二度目に書かれたもの）

大正元年十二月御粉免 佐藤啓三郎拜

和歌森太郎著「山伏」P54より

山には死者の霊が籠っているし、しかも現世において生活苦にあえいだような人たちは、そこに籠ってなかなか浮かびきれずにいて、地獄の苦しみを受けてはいないかと子孫たちは思ったりした。地獄の入口である石がごろごろしている河原は、賽の河原と呼ばれて、仏説でいう地藏菩薩のとどまるところとされた。地藏はいわば地獄の関門にあつて、あわや地獄に行かねばならないという者まで救済してくれる、非常にありがたい菩薩に考えられていたが、この地藏の信仰も、平安中期に宋からもたらされて、浄土教の教えが広がるのに相まって、貴族社会に広められてきたが、中世にはかなりの浸透力をもって地方民間に入つていった。山のなかの賽の河原と擬せられるところに、石地藏などがおかれているのは、そうした事情によるのである。

広辞苑

地藏菩薩[じぞうぼさつ] 釈尊の付託を受け、その滅後、弥勒仏の出世するまでの間、無仏の世界に住して六道の衆生を化導するという菩薩。像容は比丘形で左手に宝珠、右手に錫杖を持つ形が一般に流布する。中国では唐、日本では平安時代より盛んに尊信される。子安地藏、六地藏、延命地藏、勝軍地藏などもある。

「九州の金属鉱業」 P3 より

当時（北条氏の時代）九州では、壇ノ浦の源平合戦に破れた平氏の残党は九州一円に落ちのびたが、口碑によれば、豊前国田川郡方城村龍田鉱山（現在の末広鉱山）は平家の落人高津三左衛門頼定、およびその一族によって発見され、また日向国西臼杵郡椎葉鉱山は、民謡ひえつき節で知られている源氏の一党那須の大八郎の追討を逃れた平家の落人によって開発されたといわれている。

宮崎日日新聞 1983年11月12日

ふるさとのバス停

しか（高城町）

山の中を縫うように走る国道10号を高岡町から高城町に入ると間もなく四家（しか）のバス停。右手は深く切り立った崖（がけ）。その下にこぢんまりとした集落が見える。そこが平家落人伝説の隠れ里とされる四家地区だ。平家の残党四人が住みついたところから四家の地名がついたらしい。（略）かつて四家には良質のアンチモニーが産出し、島津藩がここに鉱山を開発。安政年間（1854-59）に掘られたといわれる“安政坑”跡が岳野（たけの）の山中にある。

14-6 修験者と鉱山開発

井上鋭夫著「山の民・川の民」（平凡社選書；1981年2月）

信仰対象である聖なる山々は、本地たる仏菩薩が宿ると考えられた。しかるに仏菩薩は黄金であるから、聖山はまた金山（かなやま）と称された。佐渡の北山（ほくざん）が金北山とよばれ、吉野山が金峯山とされたのはほんの一例である。羽黒は岩山であるが、これは山の精が岩に凝縮していると考えたもので、いずれも岩窟または唐人（かろうど・石室）や堂塔に仏像を安置している。この信仰対象である聖なる山が、すべて「カネ」（金・銀・銅・鉄）を産出したとは言えないとしても、「金山（かなやま）」がすべて信仰対象であったことは十分に考えられる。験者にとって、「金（かね）」は財政的価値よりも聖なる価値をもつものであり、仏であり光明であった。

ここに中世宗教と鉱山採掘との密接な関係が生まれる。戦国大名が鉱山採掘を大規模に行なう以前においては、鉱山採掘は験者（または僧侶）の経営するところであった。

石井進による「解説」（井上鋭夫著「山の民・川の民」（平凡社選書）所収より

戦国大名による大規模な鉱山経営が行われはじめる以前、鉱山の採取・経営にあたったのは、「法印さま」とよばれる修験者・山伏の家だったようである。けわしい山々をわたり歩いて修業をつみ、霊力をえて民衆にのぞんだ修験者たちは、また山中から聖なる金属類を採取しうる技術者でもあったらしい。今もこの地方には、数百年来の「法

印さま」が鉾山の鉾区の所有者である、という例がある。こうした修験者たちは、同時に金掘りの労働者を組織して鉾山を経営する人びとであったのである。

1 4 - 7 佐藤一族と鉾山開発

川原作成カード（土呂久図書館 A-1-7 DSC01966）

西川功著「高千穂太平記」の P186 佐藤氏系図で気付いたこと。佐藤一族は、豊後の大野郡と日向の岩戸、山裏、川登などの一帯に勢力をもっていたことがわかる。尾平、土呂久、登尾などの鉾山地帯が佐藤一族の勢力下にあったとしたら、守田三弥が国境を越えて日向の銀山開発に着手した謎も案外三弥—佐藤一族のいまだ明らかならざる関係の中に解く鍵があるのかもしれない。大野郡の佐藤家は代々大友の家臣として仕えている。